

活動参加促進のための発達障害幼児と健常幼児とのかかわりを活かした保育支援の検討

松田 典子

I 問題

統合保育により、健常幼児は思いやりの心や仲間意識が育ち、発達障害幼児は生活習慣の自立や技能の獲得が促され、健常幼児の活動参加が発達障害幼児の活動参加のためのモデルや手掛かりとなる(藤原, 2005; 柴田, 2005)などの双方にとっての利点が示唆されている。

齋藤(2001)は、発達障害幼児と健常幼児とのかかわりをもたせることで、発達障害幼児の活動参加が促進され、行動問題は低減されるか否かの検討を行った。その結果、支援を実行する保育士だけでなく対象となる全ての子どもが確実に実行できる条件を明確にすること、保育士がどのような働きかけをしたら健常幼児からのかかわりを生起させ維持させることができるかを見出すことが課題として示された。また、稲田(2005)と庄司(2003)の研究では、保育士の支援の実行可能な条件として、支援計画の内容が健常幼児の活動にも沿ったものであること、促し方が簡便であることなどが示唆されている。そこで、稲田(2005)と庄司(2003)の知見から得られた支援における配慮を、齋藤(2001)が課題に挙げた発達障害幼児と健常幼児とのかかわりを促すための支援計画に活用することで、発達障害幼児の活動参加を促進することはできないかと考えた。

II 目的

本研究では、保育所における発達障害幼児の活動参加の促進について、以下の点を検討することを目的とした。

- 1 発達障害幼児と健常幼児とのかかわりを活かした保育支援を行うことで、発達障害幼児の活動参加とその機会が促進されるか否かを検討する。
- 2 子ども同士のかかわりを活かした保育支援を行うことで、健常幼児に負担をかけることなく発達障害幼児の活動参加が促進されるか否かを検討する。

III 方法

1 対象児者

①5歳児クラスに在籍する発達障害幼児(以下、A児とする)1名、②5歳児クラスに在籍する健常幼児19名、③5歳児クラスの担任保育士1名とA児の専属の加配保育士1名であった。

2 支援の手続き

支援の手続きの流れを図1に示した。

- 1) 事前アセスメント: 図1より、直接観察と聞き取り調査によって、A児や健常幼児の活動参加の様子や一日の保育の流れ、保育内容、保育体制などの情報収集を行った。
 - 2) 支援場面の選定: 齋藤(2001)を参考に、選定条件(条件Ⅰ. 保育所での一日の生活で毎日繰り返し行われる場面、条件Ⅱ. 保育体制、保育内容、場所が変わらない場面、条件Ⅲ. 現在健常幼児とのかかわりがある、もしくはかかわりが望まれる場面)を設定した。
- 1)事前アセスメントの結果を選定条件によって評価し、支援場面として食事場面を選定した。) 支援場面のアセスメント: 直接観察とビデオ記録、聞き取り調査から、食事場面の詳細な情報収集を行った。その結果、食事場面におけるほとんどの活動でA児と健常幼児との適切・不適切な

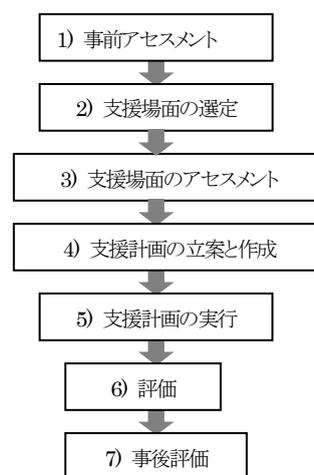


図1 支援の手続きの流れ

かかわり行動の生起が認められた。

4) 支援計画の作成:3) 支援場面のアセスメントの結果に基づき、A児の活動参加を促進するためにA児と健常幼児とのかかわりを活かした支援の手だてを検討した。食事場面での活動中に生起していたA児の行動を適切・不適切行動とかかわり行動に整理し、A児の不適切行動とかかわり行動について、直前のきっかけー行動ー直後の様子のABC分析を行った。その結果、A児の不適切行動やかかわり行動は、健常幼児の不適切行動やかかわり行動を直前のきっかけに生起することが顕著に認められた。また、A児の不適切行動に対して健常幼児が適切にかかわることで、A児の適切行動が促されることが認められた。これらの結果から、健常幼児の活動参加を促進させることで、健常幼児がA児にとっての望ましいモデルとして機能し、A児が活動に参加するための手がかりとなると推測した。そこで、食事場面でのルールを明確にしてクラス全体に定着させる、クラス全体に「みんなで声をかけ合って〇〇しましょう」とかかわりを促す等の支援を立案した。そして、担任・加配保育士、園長と協議を行い、支援計画を作成した。

5) 支援の実施:上記のプロセスで作成された支援計画の実施を担当・加配保育士に依頼した。A児と健常幼児の行動の変容や保育士の実行状況に合わせて、支援計画の修正を行った。

6) 分析方法:食事場面を準備活動、食事中の活動、号令活動に分け、①A児と健常幼児の活動参加、②A児から健常幼児、健常幼児からA児、健常幼児同士、健常幼児から全体への適切なかかわり行動、③保育士の支援について評価を行った。

7) 事後評価:稲田(2005)と齋藤(2001)を参考に、支援についての事後アンケートを作成し、担任保育士と加配保育士に記入を依頼した。

IV 結果

図2より、準備活動でのA児の準備を終える適切行動の生起は、支援計画①の介入後に安定して認められるようになった。同様に、手を膝に置く適切行動等の生起も安定して認められるようになり、号令活動での「給食を取りに来てください」と「いただきますを

しましょう」の号令をかける適切なかかわり行動の生起も支援計画①の介入後に認められるようになった。健常幼児の準備活動での不適切行動は支援計画①の介入後に減少した。図3より、食事時の活動でも、食事時間中に席を離れる健常幼児の人数に減少が認められた。しかし、図4より、食事時間中にA児が席を離れる回数は、介入による差が認められなかった。「ごちそうさまをしましょう」の号令活動においても、A児の活動参加に介入による差は認められなかった。

図5より、準備活動における健常幼児同士の適切なかかわり行動は支援計画①の介入後に増加し、維持された。同様に、食事時の活動でも健常幼児同士の適切なかかわり行動の増加が認められた。図6より、健常幼児からA児への適切なかかわり行動は、支援計画①の介入後にA児の準備が遅い時や準備後に手を膝に置く等の適切行動が生起していなかった時に生起が認められた。号令活動でも支援計画①の介入後に健常幼児からA児への適切なかかわり行動の生起が認められた。A児から健常幼児への適切なかかわり行動の生起は、「給食を取りに来てください」と「いただきますをしましょう」の号令活動において認められたが、号令活動以外では差が認められなかった。しかし、健常幼児からA児への適切なかかわり行動によってA児の適切行動の生起が認められた。

担任保育士の全体指示でのかかわりや活動参加の促しは、全ての活動で増加した。加配保育士の健常幼児へのA児とのかかわりの促しも支援計画の介入後に増加した。加配保育士のA児へのかかわりの促しは、準備活動と食事時の活動では介入による差は認められなかった。号令活動ではA児へのかかわりの促しの増加が認められた。

V 考察

準備・号令活動におけるA児の活動参加の促進は、健常幼児の活動参加の促進がA児にとっての良いモデルとなり、クラス全体へかかわりを促したことにより保育活動に沿った状況の中で健常幼児からA児への適切なかかわり行動が生起し、A児の適切行動

が促されたことによるものと考えられる。また、保育士の促しがなくても、健常幼児からA児への適切なかわり行動はA児が不適切行動を行った場合に生起が認められた。この結果から、クラス全体へかわりを促す支援方法は、従来の先行研究で示唆されている健常幼児の負担を生じさせないものとして有効であると考えられる。

ただし、食事中の活動ではA児の活動参加の変化は認められなかった。各活動内容に応じて、全体のかかわりの促しに加え、個々への活動参加の促しを付加するなどの包括的な支援計画の検討が今後の課題である。

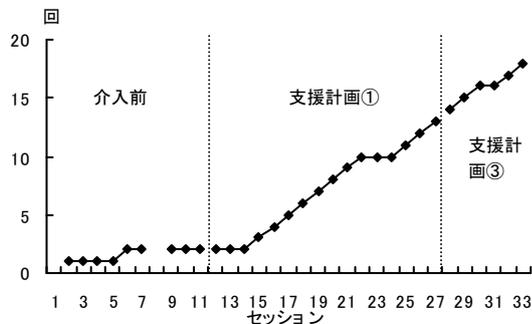


図2 A児の準備を終える適切行動の累積グラフ

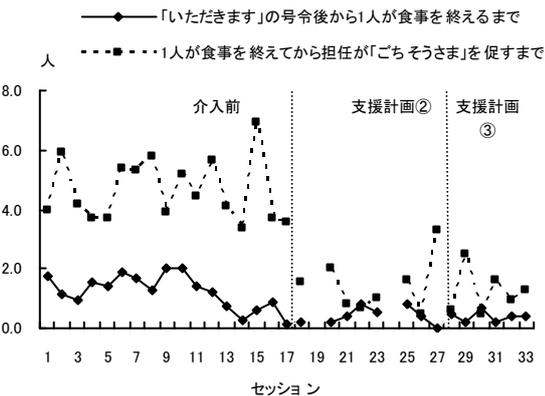


図3 食事時間中の1分間に席を離れた健常幼児の人数

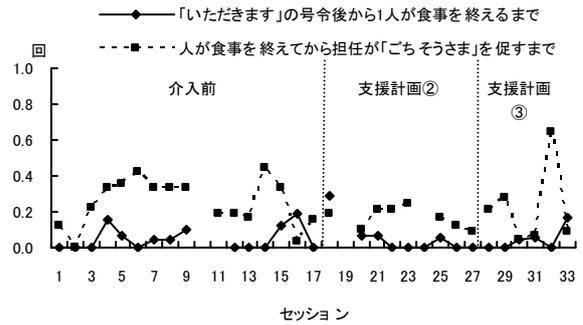


図4 食事時間中の1分間にA児が席を離れた回数

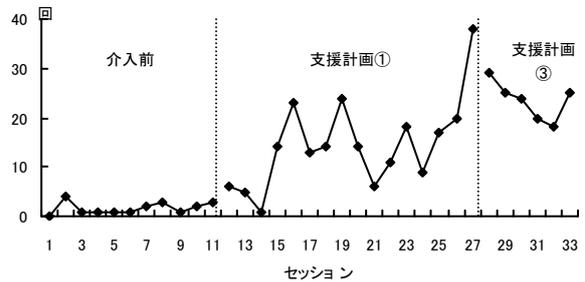


図5 準備活動の健常幼児同士の適切なかわり行動

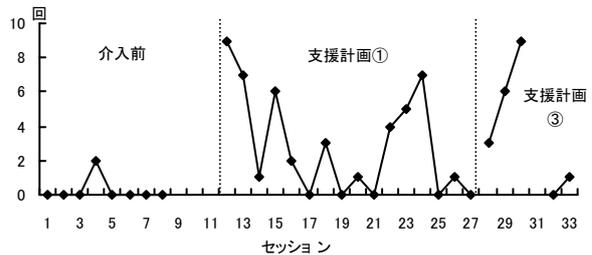


図6 準備活動の健常幼児からA児への適切なかわり行動

文献

- 藤原義博(2005) 保育士のための気になる行動から読み解く子ども支援ガイド. 学苑社
- 稲田京愛(2005) 保育活動に困難を示す発達障害幼児に対する保育支援方法の検討. 上越教育大学平成17年度修士論文(未公開).
- 齋藤勇紀(2001) 統合保育における発達障害児と健常児のかかわりのある活動の促進—機能的アセスメントに基づく支援方法からの検討—. 上越教育大学平成13年度修士論文(未公開).
- 柴田省三(2005) 障害児保育参考ノート—幼稚園・保育園で会う子どもたち—. けやき出版
- 庄司香織(2003) 統合保育場面における保育者のニーズと実状に適合した支援検討. 上越教育大学平成15年度修士論文(未公開).